

みんな で 生きる

No.447
2017 4・5

MLC
JOCS 医療を通じて、愛を世界へ。
公益社団法人
日本キリスト教海外医療協力会
JAPAN OVERSEAS CHRISTIAN MEDICAL COOPERATIVE SERVICE

1972年4月25日第三種郵便物認可 通巻447号
2017年4月10日(隔月10日発行)

特集●弓野綾タンザニアワーカーの活動
慢性疾患外来の充実と病院の人材育成を目指して

イゴコ診療所の井戸に水くみに来ていた少女
(タンザニア) 撮影 事務局・服部由起



「みんなで生きる」は、「共に生きる」とは、神の国に生きることであると思う。神の国という言葉に馴染みがない方は、それを天国とか極楽と言いかえていただいてもいいと思う。

最近、粕谷甲一神父の書かれた『殉教とこころびを越えて』（女子パウロ会、2017年）という本の中で衝撃的な物語に出会った。この逸話は、神父がマザーテレサから直接聞かれた話である。その一部を紹介させていただくと次のような話

「みんなで生きる」を求めて …… 会長 畑野研太郎

である。

「ある日、マザーのもとに子どもが来て、『お母さんが死にそうだ』と言うので訪問すると、痩せ衰えた母親が横たわり、その左右に痩せた幼児がしがみついていた。マザーが弁当を出して示すと、その母はとろんと目をあけて指を一本出し、弁当の真ん中に一本線を引き、『この半分を家の子どもたちに、残りの半分を通りの向こうのもう一つの家族にあげてください』と言ったということです。『この広い心はどこから来ると思えますか。彼女はヒンズー教徒なのです。そしてよく祈るのです。ですから、心が広いのです。わたしだったらとてもその真似はできない。わたしはこのヒンズー教徒の足もとにも及ばない』と、マザーは語り、『貧しい人は偉大でしょ』と、神父に念を押すように語られたということです。ヒンズー教徒のこのお母さんの方が十字架上で死んだイエスさまに近くて、自分の方が遠い、とマザーは言われたのです。」

この話を知って、私は震えるような思いがいたしました。「熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、私はあなたを口から吐き出そうとしている」という言葉を思い出しました。「みんなで生きる」という生き方を願って生きているのですが、私の生き方、求め方のなとなまぬるい事でしょう。いつそ目をつぶってしまった方が楽なのではと思ってしまうほどです。しかし、それにもかかわらず、この道から目をそらすことはできません。なぜなら、目をつぶり、耳をふさいで自分の幸せだけを求めてみても、そこには本当の幸せはないからです。たとえ、なまぬるい者の不十分な歩みであっても、「みんなで生きる」ことを通して神の国に生きることの他には、本当の命はないからです。この道を歩み続けさせてくださいと祈り続けたいと思います。

目次

- ・ 巻頭言
- 「みんなで生きる」を求めて …… 2
- 特集 ■ 弓野綾タンザニアワーカーの活動を紹介します。 …… 3
- ・ ワーカーからの手紙（岩本直美） …… 8
- ・ 【2016年度】国際保健医療勉強会の報告 …… 9
- ・ JOCSと私 …… 10
- ・ 国際保健医療協力セミナー報告 …… 11
- ・ 切手部通信／奨学生の横顔⑨ …… 12
- ・ 地区JOCSから／読者の声 …… 13
- ・ 東京事務局ボランティア交流会／スタンプショウ2017 …… 14
- ・ イベント案内&お知らせ／ご入会ありがとうございます …… 15
- ・ ワーカー募集／スタディツアーのご案内 …… 16



弓野綾タンザニアワーカーの活動を紹介します。



慢性疾患外来の充実と、 病院の人材育成を目指して。

2015年4月からタンザニアに赴任した弓野綾ワーカー(医師)の任期が残り1年となりました。弓野ワーカーはタボラ大司教区保健事務所(TAHO)に派遣され、TAHOと、TAHO傘下の保健医療施設の1つである聖アンナ・ミッション病院で活動を行っています。今回は、聖アンナ・ミッション病院での活動についてご紹介します。



弓野ワーカーと、聖アンナ・ミッション病院のスタッフ

タンザニアとタボラ州の 保健医療事情

タンザニアでは経済の成長に伴い、保健医療分野の改善がみられるものの、依然多くの保健医療の問題を抱えています。

出生時の平均余命は1990年には50歳でしたが2015年には66歳まで延びました(日本の平均余命84歳)。5歳未満児死亡率^{*1}も1990年には165でしたが、2015年には49まで低下しました。しかしそれでもまだこの値は世界197カ国の中で46番目の高さです。妊産婦死亡率、HIV感染率も共に高い数値となっています(2016年・UNICEF)。

JOCsが活動を行っているタボラ州はタンザニア内陸部に位置し、住民の多くは小規模な農業や牧畜で生計を立てています。住民の中にはマラリアやHIV/AIDSなどの感染症に苦しむ人たちが多く、また下痢症など不衛生な水の利用による水因性疾患も大きな問題となっています。

住民の中には、近くに医療施設のない人が多くいます。農業や

牧畜で得られる現金収入は限られているため、治療費や病院に行くまでの交通費が工面できず、重症化するまで医療施設で診察を受けられなかったため、手遅れになってしまいう人も少なくありません。

タボラ州では、人口1万人当たりの医療施設数が1.5、医師の数が0.26人、看護師助産師の数が2.1人で、タンザニア全26州のうち下から2番目という低い水準です。東アフリカでも最も保健医療が行き渡らない地域のひとつです(2007年・WHO)。病院、医薬品、医療人材など全てが不足しています。加えて、炭水化物中心の食習慣や生活習慣の変化による運動不足などが原因で、糖尿病、高血圧など慢性疾患が増え、これら病気の治療や、これらの病気に対する病院スタッフのケア能力の向上も求められています。

弓野ワーカーの活動内容

弓野ワーカーは、2015年4月にタンザニアに赴任し、ダルエ

^{*1} 出生時から満5歳に達する日までに死亡する確率。出生1000人あたりの死亡数で表す

聖アンナ・ミッション病院 概要

病床数	50床
外来患者	月間2,000人超
外来診療科目	一般、救急、周産期、HIV感染治療
入院施設	成人、周産期、小児
その他の施設	検査棟、手術室

スサラームでの3カ月の語学研修を経て、同年7月からタボラ大司教区で活動しています。語学研修中には、その後の活動で使用するため、スワヒリ語・日本語・英語の医療用語辞典を作成し、携帯端末で使えるようにしました。

弓野ワーカーが活動している聖アンナ・ミッション病院では、マラリア、肺炎、重症貧血（マラリア、低栄養、HIVなどによる）の患者が特に多く見られます。2015年には新病棟が完成し、より充実した保健医療サービスを提供できるようになり、地域の人たちに提供できるようになりました。現在、弓野ワーカーは、この聖アンナ・ミッション病院で週に4日、現地スタッフと一緒に病棟回診や外来診療を行っています。一緒に働く現地スタッフ

の中には、JOC Sの奨学金で研修を受けた人も多くいます。病棟回診では、主に救急外来での受診後に入院した患者の、経過の把握と診療に関する助言を行っています。タボラへの赴任直後は、他の医師と一緒に診察を行い、タボラに適した治療や診断法を学びながら、マラリアや下痢症、周産期合併症などタボラに多い症例を経験し、弓野ワーカー自身が対応できる診療範囲を検討しました。その後、弓野ワーカー単独で診療を行うようになり、また内科疾患などが複雑症例として紹介されてきた場合など、必要な際には他の医師に助言も行うようになりました。

診療に加え、病院で毎朝行われている症例検討会では、診療上の助言も行っています。他の医師から「心電図読影を学びたい」という要望があったため、週に2回心電図勉強会を始めました。しかし、外国から寄付された心電図の機械が故障し、その後修理したものの今度は結果を印刷する感熱紙の在庫がなくなっていました。タングザニア国内ではその感熱紙を手でできなかったため、しばらくの間心電図の検査ができず、勉強会

も中断されました。2017年3月によりやく感熱紙が入手でき、検査を再開しました。



慢性疾患外来の開始

タボラでは、糖尿病、高血圧、心不全などの慢性疾患が増加しています。聖アンナ・ミッション病院で多い病気はマラリアなどの感染症ですが、病棟や救急外来の重症者の中には、高血圧や心臓の病気、糖尿病患者が増えており、その死亡率も高くなっています。病院に来るまでそのような病気があると知らなかった人もたくさんい

ます。弓野ワーカーが同病院で調査したところ、慢性疾患の治療を受けていない人や、治療を中断してしまった人が非常に多いことがわかりました。

慢性疾患の治療を適切に受けられる患者が、まずは聖アンナ・ミッション病院で、ひいてはタボラ全域で増えることを目標に、2016年4月に聖アンナ・ミッション院内に慢性疾患外来が立ち上げられ、弓野ワーカーはそこで診療を始めました。目標を達成するため、①新規の慢性疾患の受診患者を増やすこと、②慢性疾



- 午前 6:30 起床 
- 午前 7:00 朝食
- 午前 7:30 自転車でお勤
- 午前 8:00 朝食
- 午前 8:30 症例検討会
- 午前 9:00 救急外来の診療開始
成人または小児病棟回診の支援
- 午前 11:30 病院裏の修道院にて休憩
- 午後 0:00 診療
- 午後 3:00 病院裏の修道院にて昼食
- 午後 3:30 退勤
- 午後 4:00 自室で休憩、またはスワヒリ語講座、運動、聖歌隊練習などに参加
- 午後 5:30 洗濯、入浴、掃除
- 午後 7:00 大司教区食堂にて夕食
- 午後 8:00 メールチェック、勉強、原稿執筆
病院で使う資料の作成など 
- 午後 11:00 就寝



患者者に継続して治療を受けても
らうこと、③病院スタッフの慢性
疾患ケア能力向上の3つに取り組
んでいます。

①新規受診患者を増やす取り組み

弓野ワーカーは、通常の外来
診療で慢性疾患の患者を発掘する
ため、簡易版の院内紹介状を作っ
て一般外来の診察室、救急外来な
どに置き、慢性疾患の患者を院内
で慢性疾患外来へ紹介する仕組み
を作りました。慢性疾患の患者に
きちんと治療を受ける機会を提供
するとともに、病院に来る患者の
中に慢性疾患の患者が存在する
ということを知り、病院のスタッフが
意識するのにも役立っています。
2016年4月の慢性疾患外来開
始から12月までの9カ月間に、
233名が新規患者として慢性疾

患外来に登録しました。少しでも
治療を受けやすくするため、無保
険の人は無料で診察しています。
週1回の慢性疾患外来には、毎
回40〜45名が受診しています。慢
性疾患の患者に継続して治療を受
けてもらうため、弓野ワーカーは
様々な工夫をしています。そのひ
とは健康教室です。診察開始ま
での15分ほどの時間に、他の病院
スタッフと一緒に、病気の特徴と
治療、治療を継続することの重要
性、生活する上での注意点などを
伝えていきます。慢性疾患外来で弓
野ワーカーと一緒に働く栄養士の
モニカさんが食事療法について説
明することもあります。また慢性
疾患外来の壁には、生活習慣の改
善、毎日の服薬、定期的な通院な
どの重要性を説いたポスターを貼
り、患者への啓発も行っています。

当初弓野ワ
ーカーは、早期に
病気を発見し、
患者に早期に治
療を始めてもら
うため、聖アン
ナ・ミッシオン
病院で健康診断
を行い、診断や

治療を受けていない新規の慢性疾
患患者を発見することも目指して
いました。健康診断を受けた人
はたくさんいますが、慢性疾患の
検査としてコレステロールや尿酸
を測るのは非常に高額です。検査
をして保険がおりなかつた場合
は、その費用を聖アンナ・ミッシ
オン病院が負担しなくてはなりませ
ん。そのため、安価に計測できる
BMI^{*}や血圧、血糖値などで代替
することを検討しています。

②継続治療のための取り組み

慢性疾患外来を始めた頃は、
診察予約日に患者がきちんと受診
せず、治療を継続できないことが
多くありました。弓野ワーカーが
モニカさんに相談したところ、
「1カ月後の予約は忘れてしまう
から、予約日の前日に携帯電話に
メッセージを送ったらよいので
は」と助言されました。この助言
どおりに、対象となる患者の携帯
電話に一斉にメッセージを送って
みたところ、8割の人がきちんと
診察を受けるようになりました。

慢性疾患外来を開始した4月
には再診患者は7名でしたが、12
月には155名まで増えました。

病院全体での慢性疾患の年間受診
件数も2015年の1986名か
ら2016年には3092名へ、
約1000名増えました。受診す
る患者の数が増えただけでなく、
継続して通院している患者の平均
血圧にも改善が見られています。
患者数が増え、弓野ワーカーだ
けで対応することが難しくなっ
てきた時、同じ病院で働くフランシ
ス医師が慢性疾患外来で働くこと
を希望してくれました。今では、
弓野ワーカーに加え、フランシス
医師、モニカさん、看護師の4人
体制となり、必要に応じて聖アン
ナ・ミッシオン病院院長のシス
ター・シャイニー医師も加わり、
長期的に継続できるように外来を
目指しています。今後も慢性疾患
外来の患者数は増え続けることが
予想されています。そのため、
2017年3月から慢性疾患外来
が週1回から2回に増やされまし
た。これにより、聖アンナ・ミッ
シオン病院で慢性疾患の治療を適
切に受けられる患者がさらに増え
ることが期待されます。

慢性疾患外来を開始した4月
には再診患者は7名でしたが、12
月には155名まで増えました。



健康教室での弓野ワーカー



食事療法について話すモニカさん

当初弓野ワ
ーカーは、早期に
病気を発見し、
患者に早期に治
療を始めてもら
うため、聖アン
ナ・ミッシオン
病院で健康診断
を行い、診断や

*2 BMI = $\frac{\text{体重 (kg)}}{\text{身長 (m)}^2}$

③病院スタッフの

慢性疾患ケア能力の向上のために

将来的に現地のスタッフだけで活動を続けていけるよう、弓野ワーカーは病院スタッフの慢性疾患ケア能力の向上にも取り組んでいます。院内紹介システムの導入や慢性疾患外来への保健医療スタッフの増員などによって、慢性疾患の外来患者が増えていることを病院スタッフに周知することができました。今後は慢性疾患外来で勤務する医師にカルテの適切な記入の仕方を伝達し、技術移転を進める予定です。

加えて、技術移転のため、急激に症状が悪化することはないが長期的な治療を必要とする慢性期の治療ガイドラインを作成する予定でした。しかし、救急外来での勤務を通じ、心不全や糖尿病の急激な悪化などの急性期の症状で運ばれてくる人が多いとわかり、急性期の治療も教えた方が良くと考えられるようになりました。そのため、治療頻度の高い5〜10種程度の慢性疾患について、急性期と慢性期の両方の治療ガイドラインを作る予定にしています。

J O C S の元奨学生で、同病院

「かかりつけ医」として、
患者さんが長く健康に暮らす
お手伝いをしています。

弓野 綾



慢性疾患外来で診察する弓野ワーカー

タンザニアに来て2年が経ちました。言語や文化の違う人々と共に生活し働くなか、驚きも悩みも様々にあったことが思い出されます。日本では意識しなかった食事のことですら、当たり前前に食べられない人が多く、私のできることは何なのかと考えます。

活動の中で驚き困ったことといえば、カルテ（医療記録）の保管です。同じ患者さんにカルテが何冊もあり、受診記録は大小の用紙に順不同で書かれていて前後関係もよくわからず、数回以上前の受診の記録は追うことができませんでした。短期間の治療であればこの仕組みでも対応できますが、定期的に長く診察する必要がある妊婦・小児健診、またHIV感染症や慢性疾患等の長い経過をたどる病気の治療には対応できません。妊婦・小児健診、HIV感染症の治療には、記録が追えるようにそれぞれ特別なカルテが作られています。しかし、慢性疾患には赴任当初、その仕組みはなく、結果的に患者さんの治療が継続されず、多くの方が具合が悪くなってから来院していました。

日本では、慢性疾患を持つ患者

さんの多くは70歳以上ですが、タンザニアでは、慢性疾患を予防・治療する仕組みが弱いためか、患者さんが40〜50代であることもしばしばです。救急外来や病棟に来た働き盛りの患者さんが心不全や脳梗塞で亡くなると、大家族がベッドを取り囲んで悲しみに暮れます。10代前半のお子さんが「しっかりしなければ」という顔で涙を拭いて説明を聞くのを見ると、胸が痛みます。私自身、日本で家庭医として患者さんを継続的に診て、病気の予防や治療をすることを訓練されてきたので、「このように、患者さんと会えるのが一度きりで短い時間になってしまっただけは十分な治療にならない」と悩み、「私は何をしに来たのか。もっとタボラで需要の高い産婦人科・小児科などが専門ならともかく、私の力が必要とされていないんじゃないか」と泣いて過ごす夜もありました。また、いくら日本人が良い仕組みを作ろうとしても、現地のスタッフが必要性を感じず、また維持できないのであれば、砂で城を建てるようなもので、私がいなくなった後には崩れて、砂地に戻るだけではないかと虚しくなる

の院長を務めるシスター・シャイニー医師は、弓野ワーカーの働きについて、「慢性疾患外来を開始し、慢性疾患患者が継続して診察を受けにくるようになったため、心不全が悪化して一般外来にかかる患者の数が減っています。慢性疾患患者への手厚いケアの成果だと思われます。弓野ワーカーの活動によってたくさんの人たちが命を救われています。また、弓野ワーカーがいつも人材育成の視点を持って働いてくれていることに感謝しています」と述べています。

弓野ワーカーは、これから、残りの任期もT A H Oでの仕事と聖アンナ・ミッシオン病院での仕事の両方に取り組みます。その中でも特に、慢性疾患の治療を適切に受けられる患者が増えるよう、現在実施している慢性疾患の新規受診患者を増やし、そしてその患者に継続して治療を受けてもらえるよう取り組みを続けていきます。また、地元の医療スタッフだけでなく慢性疾患外来を続けていけるよう、病院スタッフの能力向上にも引き続き取り組んでいきます。弓野ワーカーの働きを、これからもお支えください。

こともありました。

そんな中、光の当たらなかつた慢性疾患の患者さんの健康改善のために、2016年の4月から慢性疾患外来を開始しました。外来を定期的に開き、専用カルテを作り、次回の受診日を決め、受診前日には患者さんに連絡するようにしました。最初は十数人だった患者さんも増え、今では50人前後が毎週受診するようになりました。

この慢性疾患外来を始めて何より嬉しいのは、「病気が悪くなる前に防いでいる」と思う患者さんに会えることです。心不全で入院していた患者さんが回復し元気に通院する姿にとっても励まされます。また、毎月受診する患者さんとは病気以外の暮らしの話もできるようになり、夫婦や親子でかかる方たちもいて、「かかりつけ医」として患者さんの健康を守るために働いているという意識が持てるようになりました。

また、患者さんが増えるにつれ、一緒に働く慢性疾患外来スタッフの意識が変わり、「定期的な受診と計画的な検査、治療によって、病気の悪化を防げる」という認識が共有されてきました。そして、

私がいなくなつた後も外来を継続的に運営するには、また、患者さんが健康に過ごすにはどうしたら良いかという視点を持って外来の運営方法を考えてくれるようになりました。

先日、慢性疾患外来スタッフの会議が初めて持たれ、患者さんを待たせない仕組みにすること、患者さんが通いやすい場所に外来を設けること、誰でも簡単に記録できるカルテにすること、などを目指して話し合いが行われました。

その結果、外来を週2日に増やし、患者さんの通いやすい一般外来のそばに診察室を設けること、慢性疾患外来専用カルテを簡略化して、保管に気をつけつつ病院カ

ルテと統合すること等の改善点が決まりました。

印象に残つたのは、私が反対を恐れて改善策をなかなか言えなかつたのだと知つた院長でもあるシスター・シャイニーが、「怖がらないで。私たちの外来だから良くしていきましょう」と言ってくれたことと、私が外来を休む予定の日に、運営が心配で予約患者さんを減らそうとしたら、フランス医師が「それでは患者さんが不便だろう。大丈夫、あなたがなくても全員診るから、任せておいて」と言つて、実際に診察してくれたことです。変化を怖がらないこと、人を信頼して任せることの大切さを学んでいます。



シスター・シャイニーと弓野ワーカー



慢性疾患外来を担当するフランス医師

ワーカーからの手紙

毎回、ワーカーの近況報告を掲載します。
今回はバングラデシュの岩本直美さんです。

20センチ

バングラデシュ派遣ワーカー 岩本直美

ジョニーは、アメリカの大学で宗教学や心理学を教えている米国人教師だ。歴史的に交わることのほとんどなかった、地元デトロイトの黒人と白人の和解のための集いも続けている。毎年ラルシュを訪ねてくれ、その度に私は、彼にアシスタントたちへの講義をお願いする。今回は、対立する世界の状況と、その中における私たちの



ラルシュのお別れ会でのジョニー（中央）

コミュニティの役割について語っていただいた。その中でもおもしろい質問が一つあった。「世界最大の遠距離はどれくらいか？」というものであった。まるで禅問答のような問いかけに、アシスタントたちは口をぽかんと開けたままであった。

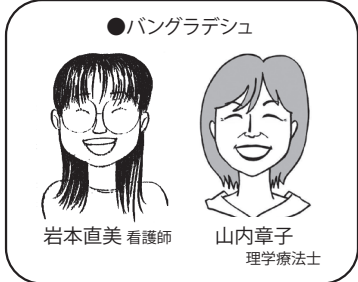
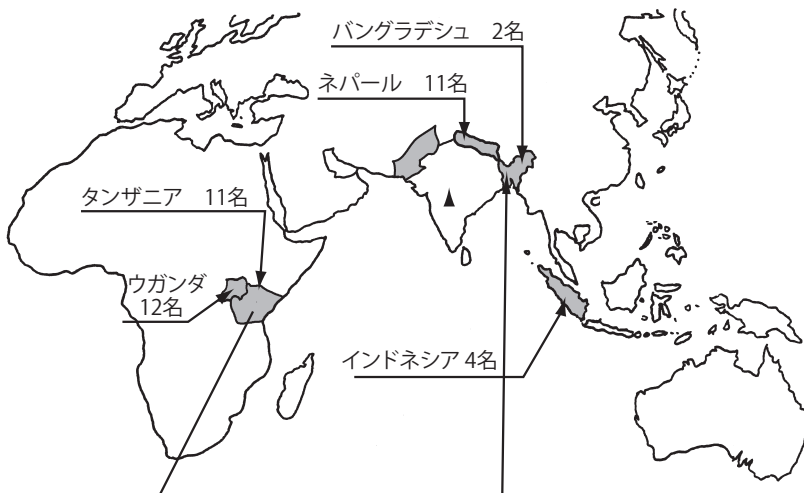
2時間ほどの講義の最後に、ジョニーは彼自身の物語を語ってくれた。「2年半ほど自分はある友人とうまくいかず苦しんできた。自分の隣人を愛せよというイエスの教えを実際に生きることが、自分にとって本当に難しい。和解のために働くカウンセラーと親しい友人たちに同伴してもらい、何度も彼との対話を続けてきた。時には怒鳴りあい、時にはお互いが涙してきた。でも最近の対話でその友人が最後にこう言ったんだ。『今回は初めて、おまえの立場に

立って考えることができたよ、ジョニー』って。どういうことか分かるかい？彼はいつも自分の主張が正しいと頭で理解してきた。だけれどあの時の対話では、彼は頭で理解しようとはせず心で受け留めたんだ。想像できないほどの彼の態度の変化だった。世界最大の遠距離は、実は20センチなんだ。分かるかい、この意味が？（ジョニーは自分の頭と胸を指しながら言葉を続けた）。最も深遠な距離だ、でも20センチなんだよ。彼のおか

げで、自分も彼の立場に立って考えることができた。」
この教養のある米国人教師が、自分の苦しみを私たちに吐露してくれたことは驚きであった。そして彼のその謙遜と、私たちへの信頼に感謝した。ジョニーと彼の友人との対話は今も続いている。静かな緊張関係にある黒人と白人の対話の場を持ち続ける強さは、まづ何よりジョニー自身が自分自身の内なる和解を生きようとする、その誠実によっているのであろう。

(2017年3月現在)

JOCS派遣ワーカー・現在の奨学生数 (国名の後の数字)



【2016年度】 国際保健医療勉強会を 開催しました

JOC Sでは、将来国際保健医療協力活動に携わることが希望する人を対象に、国際保健医療勉強会を東京事務局で実施しています。

2016年度は、宮川眞一元ワーカー（バングラデシユ派遣・医師）と倉辻忠俊元シニアワーカー（タンザニア派遣・医師）に講師をお願いしました。また事務局からは森田事務局長と高橋職員が講師を務めました。

勉強会終了後には、事前申し込みをした希望者に対し、講師が進路相談にのる機会を設けました。参加者の勉強会での学びが、今後につながることを願っています。

第1回

バングラデシユでの
学校保健教育プロジェクト報告

日時：2016年6月4日（土）

15時～17時

講師：高橋淳子（JOC S東京事務局スタッフ）

内容：JOC Sがバングラデシユで現地協力団体BDP (Basic Development Partners) と取り組んだ、学校保健教育プロジェクトについて。

参加者の感想：『日本でも日々の学校保健の中で、子どもへ、保護者へ、教職員へ伝えていくのが大変だなと実感する中、文化が違うバングラデシユでの保健教育のプロジェクトをやっていることがすごいと思いました。』

第2回

何を、如何に
「コミュニティヘルスプロジェクトへの関わりを中心に」

日時：2016年10月29日（土）

15時～17時

講師：宮川眞一元ワーカー（医師）
内容：岩村昇元ワーカーとの出会いから医師を志したこと、学生時代にバングラデシユを訪問した際の話など、ワーカーになるまでの話から、バングラデシユの現状やワーカーとしての活動について。国際開発の潮流と国際保健医療分野の指標について。

参加者の感想：『宮川先生の豊富なご経験に裏付けされた、穏やか

ながらも、バングラデシユやそこに生きる人々への熱い思いが伝わってお話でした。同じ業界で働く後輩として大変勉強になりました。』

第3回

母子保健：
国際協力の方法と評価

日時：2016年11月18日（金）

18時30分～20時30分

講師：倉辻忠俊元ワーカー（医師）
内容：母子保健に関する国際機関による定義や統計について。母乳と人工乳の場合の感染症、黄疸、低体重のリスクとリスク比などの計算方法と、その考え方などについて。

参加者の感想：『保健評価の方法、注意すべき点について、とても参考になるお話をうかがうことができました。来年から調査でケニア

に行きますが、今回学んだことを活かしたいと思います。』

第4回

国際協力と
プロジェクトマネジメント

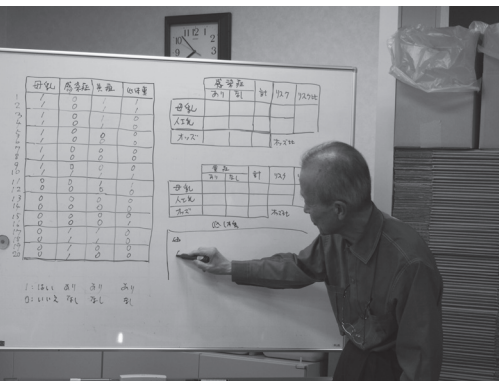
日時：2017年1月27日（金）

18時30分～20時30分

講師：森田隆（JOC S事務局長）
内容：JOC Sの基本方針、海外事業および国内諸活動について。プロジェクトの概念とそのサイクル、技術移転とサービスデリバリーの違いなどについて。
参加者の感想：『開発協力は、ただ単に援助することではなく、プロジェクト、計画性、妥当性などをふまえた上で取り組むものであることを学びました。JICAのボランティアとして活動しているうえで直面した壁でした。』



自身のバングラデシユでの活動について話す宮川ワーカー。



計算方法について説明する倉辻ワーカー。

JOCSと私

どんな人がJOCSに関わっているの？ JOCSとのつながりや思い出などを書いてもらうページです！今回は、昨年度に東京事務局でインターンシップ生として活動した大学生をご紹介します。



インターンシップを振り返って

清田量兵 (せいだ りょうへい)
JOCS インターン生、大学生

私がJOCSと出会ったのは、大学の必修単位にインターンシップがあったことがきっかけでした。私が専攻している国際協力の分野では、必修単位の中に実習項目があり、インターンシップと教授率研修のどちらかを選べました。その中でインターンシップを選んだ理由は2つあります。1つは研修より将来役立つことを学べると思ったため、そしてもう1つは、研修よりお金がかからないと思ったためです。ところが履修登録をしてみると、交通費は自己負担で、大まかに計算しても数万円はかかることがわかりました。奨学金とバイト代を足して学費を支払っている私にとっては大きな痛手で、履修するか悩みました。しかし単位は取得しなければならぬので、説明会に行ってみると、前年度にインターンシップに行った先輩が実習先について説明してくれました。その実習先は、職員の方々優しくあたたかい職場であり、インターンシップ生の希望を最大限聞いてくれるだけでなく交通費も支給されるとのことでした。こんなに魅力的な話はないと思います、履修することを決めました。

それがJOCSとの出会いでした。今学期にインターンシップを履修したのは私1人で、初めて挨拶に行った時は不安でしたが、気さくな職員の方々が迎えてくれました。そこでチャリティ映画会の企画に関わることが決まり、11月から実習を開始しました。最初のころは緊張してその日の業務をこなすことに必死で、要領をつかむのに時間がかかりましたが、慣れてくるにつれて仕事にやりがいを感じるようになりました。

実習中に私がやった仕事は、映画会の企画書やチラシの作成、広報活動などでした。チラシは、前回のものを見本に記載内容を考えました。広報活動では電話かけをして新聞に掲載してもらい、手応えを感じながら仕事をすることができました。様々な事務作業を行う中でミスをすることも何度かあり、一つのミスを取り戻すことがどれだけ大変なのか学びました。映画会当日は雨が降っていたにもかかわらず、たくさんの方に来ていただき、満足していただけました。企画の楽しさを知る良い機会になりました。

にはなかった切手収集ボックスの企画を任せてもらうことになり、少ない時間の中で予算の見積もりやデザインの考案などを行いました。この企画は見本となるものになかったため、大きさや型を決める作業から始めました。見積もりを出すにあたって、紙の素材や厚さ、表面のコーティングやカラーなど専門的な知識を必要とするところが多々あり、一つひとつを確認する必要があるため、とても手間がかかりました。完成品が届くのは実習終了後なのですぐに確認することはできませんが、完成が楽しみです。

これらの活動を通して、仕事の大変さや社会人の責任の重さだけでなく、仕事をするうえで職場の環境がどれほど重要かを学びました。これから社会人になる者として、就職先を決めるために重要なものに気付いたことが何よりも大きな収穫でした。職員の方々はもちろんですが、日ごろからJOCSの活動を支えてくださっている支援者の方々がいるからこそ、このような貴重な経験ができたと思っています。本当にありがとうございます。

ごさいました。

実習を進める中で、当初の予定

国際保健医療協力フィールドセミナー報告

「人々に寄り添う支援」とはどういうものか、 考える機会になりました。

2016年12月29日～30日、4名の参加者を得て、フィールドセミナー「横浜・寿地区で人々とともに生きる姿勢を学ぶ2日間」を実施しました。

お二人の参加者の感想を抜粋してご紹介します。

セミナーでは、寿地区の成り立ちや変遷、そこに生きる人々の暮らしや思いなどについて、カラバオの会（寿・外国人出稼ぎ労働者と連帯する会）、寿日雇労働組合、寿医療班で活動しておられる方々からお話を伺い、夜回りや炊き出し、医療相談に参加しました。また薬物依存についての勉強会にも加わり、当事者の体験から、薬物依存に追い込まれる社会的、心理的な背景や、依存症からの回復に当事者同士の支え合いと家族の理解・協力が不可欠であることを学びました。いずれのプログラムでも質問や意見が活発に出され、食事や移動等の間も含めて、ともに学び、分かち合う時間となりました。

医療班のテントで行われた医療相談に参加し、血圧測定などを行いました。



炊き出しの準備に加わり、たくさん野菜を切りました。

田邊綾さん（医学生）

困窮から抜け出せない人たちをどのような形で支援しているのか、自分は今、何ができるのか、何を今後、修得すべきかを知ることが、今回のセミナーを通じて最も学びたいことでした。寿地区で行われている活動には、援助をする側、援助を受ける側というような線引きがなく、かかえている問題を同じ目線から共に考え、皆一体となつて解決していこうとする姿勢が非常に印象的でした。また、一人ひとりができることは限られています。皆で行えばこんな大規模な活動が行えるものかと驚きました。



野村岬さん（医療系団体職員）
人生は一度きりで、失敗しない人などいません。誰しも、弱い部分を抱えながら、自分に与えられた生を懸命に生きています。寿町での人々の支え合いを見て、その当たり前のことが、現代社会では忘れられているように感じました。「家庭は労働力の再生産の場」という近藤昇さん（寿日雇労働組合）の言葉。現代社会は、人間のことを「労働力としてどれだけ価値があるか」だけで判断しているのではないのでしょうか。そしてその社会の中で、多くの人が、いつしか他人のことを、労働力としてしか評価できなくなっているのかもしれない。けれど、この世に生を受けている、その点で人は限りなく平等で、精一杯生きていく人生に優劣などないのだという当たり前のことに気づかされました。

真の豊かさとは。家族や人々との絆とは。人々に寄り添う支援とは。まだ答えが出ませんが、自分自身のテーマとしてこれからも考え続け、自分にできることを行動に移していきたいと思えます。

1946年の20銭切手です



切手部通信

今月の満月切手



2017年度の切手部がスタートしました。2016年度は、前年度に比べ使用済み切手のご寄付による換金額は減少してしまいました。ただ、外国コインと書き損じハガキのご寄付が昨年よりも増加したので、使用済み切手と合わせた合計の換金額はほぼ2015年度並になりました。多くのご協力に、誌上を借りて、心からの感謝を申し上げます。

また、切手コレクターさんたちが使用済み切手の7.5キロボックスを受け取るまでの待ち日数を、約1カ月から大幅に減らすことができました。理由は、年間100箱以上をまとめて換金してくださる切手商さんからのご注文をお断りしたことが大きかったと思われれます。

外国コインに関しては、精力的にご寄付のお願いをするようになってから5年になりますが、おかげさまでその換金額は4倍以上になりました。誌上でもお願いを

出しましたが、ホームページによる広報が功を奏したと思われる。書き損じハガキも同じように伸びています。これもホームページの広報の効果が大きいと思います。というのも、書き損じハガキも外国コインも、同業の非営利団体に比べて参入が遅れていましたが、Googleの検索ページの上位進出の進度に合わせて寄付が増加していると明快に感じられるからです。外国コインは、予想外に検索の上位になり、現在4位くらいになっています。また書き損じハガキは、現在6、7位にまでなることができました。

「使用済み切手運動のJOCs」というブランドがあるから、後発である「外国コイン」「書き損じハガキ」という検索ワードも、早期に検索上位になることができたのだと思います。ホームページ管理も担当している私としては、JOCsのブランド力を強く感じています。

(山中)

奨学生の横顔⑨

爆弾テロの被害者への対応を契機に
外科の看護の必要性を感じました。



インドネシア
ラデン・バグース・
ハリヤントさん
シナルカシ病院

私はスラウェシ島にあるテンテナという町で暮らしています。テナテナは宗教紛争の影響を受けたため、開発が大きく遅れています。清潔でない水を飲んで下痢症になる子どもたちが多くいます。舗装されていない道路も多く、病院に来るのが大変な人たちもたくさんいます。

2005年には、テンテナにある市場の近くで大きな爆弾テロが起き、50人以上が亡くなりました。その時、私は准看護師としてシナルカシ病院で働いていました。町には病院が1つしかなく、同僚たちと一緒に次々に搬送されて来る患者の対応にあたりました。もう2度とあのようなことが起きてほしくないかと祈っています。この事件のあと、もっと看護、特に外科の分野に関する知識や技術を得た

いと思うようになり、JOCsの奨学金を得て、看護学校で2年半、正看護師になるための研修を受けることができました。JOCsの支援者の皆様に心より感謝いたします。研修では、自分が病院で行っていた看護の裏付けとなる理論を学ぶことができたことが、とても有意義でした。正看護師の資格を取得した後はシナルカシ病院に戻り、現在は外科の看護主任を務めています。

現在シナルカシ病院では、重症の患者が運ばれてきた時には、応急処置をして都市部にある大きな病院まで搬送するしかありません。山道を救急車で急いでも2時間近くかかるため、搬送の途中で命を落とす人もたくさんいます。このような命を救うため、今後、外科や集中治療の専門看護の勉強をしたいと思っています。

私には子どもが3人いますが、みんな将来は看護師になりシナルカシ病院で働きたいと言っています。とてもうれしく、誇らしく思います。私はテンテナの町やそこに暮らす人たちが大好きです。今後もテンテナの人たちのため、看護師として働いていきたいです。

地域JOCsから

●**仙台JOCs** 切手整理作業「きつてきつぺ」を毎月第2土曜日14～16時に仙台市市民活動サポートセンターで行っています。2月は、子どもから大人まで12名の参加がありました。切手整理作業は誰でもできる国際協力です。初めての方も気軽にご参加ください。

●**足利JOCs** 2月19日(日)にミーティングを開催し、次年度の計画について話し合いました。子どもから大人まで参加できる、ファミリーコンサートのよつなイベントを今後も企画していきます。

●**町田JOCs** 今年最初の集まりは、1階の会議室ではなくホームご入所の皆様が使われている3階の休憩室で切手チョコキを行いました。メディカルホームグラニー玉川学園を例会会場にさせていただいてから、お住まいのご高齢のご利用

者の皆様と一緒にチョコキできる日が来るのを楽しみにしています。今回は一緒に切手整理はかきませんでしたが、そのうち覗きにきてくださるかなあと思いつきながら作業をしました。今年度も、毎月第3水曜日に切手の整理作業を行う予定です。

●**京都JOCs** 3月12日(日)に、4月8日(土)に開催したチャリティーウォークソンと7月28日(金)に開催予定のチャリティーコンサートについて、話し合いました。チャリティーウォークソンについては次号で報告します。次回の委員会は、5月28日(日)です。

●**大阪JOCs** 2月6日(月)に委員会を開催し、今年度のイベントについて話し合いました。次回の大阪JOCsカフェは、7月7日(金)の夕方から船戸正久医師をゲストに開店します。決まりましたらご案内します。4月以降のオープンサタデーの講師は決定しました。多彩な顔ぶれです。

●**芦屋JOCs** 2月26日(日)に芦屋聖マルコ教会にて委員会が行われ、今年度のつどいが決定しました。6月18日(日)14時から、芦屋聖マルコ教会にて畑野研太郎JOCs会長が話します。ぜひお誘いあわせの上、ご来場ください。

●**神戸JOCs** 今年度のイベントを10月頃開催できるよう、講師に交渉中です。講師が決まったら、開催会場を決め、準備に取りかかります。次回の委員会は6月17日(土)です。また今後、新しい委員についても話し合う予定です。

●**四国高知JOCs** 11月26日(日)に植松功JOCs理事を講師に、高知教会でつどいを開催します。また26日の前後に他所でも話をしてほしいという希望が出ています。6月3日(土)に例会を開き、準備を始めます。

お問い合わせはJOCsの各事務局へ
東京事務局へ…仙台・足利・町田JOCs
関西事務局へ…大阪・京都・芦屋・神戸・
四国高知JOCs

(電話番号は16ページをご覧ください)

読者の声

本誌2・3月号のアンケートから

◆『みんなで生きる』を通して、ワーカーの皆様の活躍ぶりをいつも感動しつつ拝見しています。今後も事故なく無事に続けていかれることをお祈りいたします。

◆私は91歳になります。当初から会の趣旨に賛同しお仲間に入っていたできました。ながく教職にあり、実際の働きに参加することはできませんでしたが、諸報告を読み、私自身も共に育てていただきました。子どもたちに伝えたこともたくさんあります。

◆T A H Oの診療統計の集計システムが確立し、地域医療の改善につながりますようお祈りしています！



ボランティア交流会 を開催しました。

【東京事務局】

多くのボランティアさんが参加してくれた交流会の様子



日ごろ、事務局では多くのボランティアの皆様にご協力いただいています。ボランティアさんは、送られてくるたくさんの使用済み切手の整理や発送物の切手貼り、封入作業など、たくさんの業務を担ってくださっています。

ボランティアさんへの感謝をこめ、またボランティアさん同士の交流を深めていただけるように、東京、大阪の各事務局では年に一度、ボランティア交流会を行っています。東京事務局では2月3日(金)に交流会を開催し、ボランティアさんと職員合わせて30名が参加しました。

ボランティアさんは、子育てが一段落した方、退職された方、お子さんが学校に通っている時間に来てくださる方など、年齢も背景もさまざまです。日ごろは事務局にいらっしゃる曜日も頻度も違うので、なかなか皆でお話する機会がありません。森田事務局長から感謝のご挨拶と昨年1年間のJOCSの活動報告をした後、昼食をいただきながら、JOCSの活動にかかわったきっかけや、日ごろのボランティア活動での発見や喜びなどを語り合い、最後はビンゴ大会で盛り上がりました。

ボランティア活動に関心のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度体験にいらしてください。

スタンプショウ 2017

今年も、東京・浅草で開かれる「スタンプショウ2017」に出展いたします。会場では切手商フロア(7階)にブースをお借りし、使用済み切手等の販売を行います。

皆様のご来場をお待ちしております。

◆日時：4月21日(金)～4月23日(日)

* JOCSは21日、22日のみ出展
10時～17時(最終日は16時まで)

◆会場：東京都立産業貿易センター台東館 6・7階
(東京都台東区花川戸2-6-5)

◆アクセス：

- ・東京メトロ銀座線、東武・東京スカイツリーライン線の「浅草駅」から徒歩5分
- ・都営浅草線「浅草駅」から徒歩8分
- ・つくばエクスプレス「浅草駅」から徒歩9分

◆入場無料

◆主催：公益財団法人日本郵趣協会



JOCSの動き

東京事務局…〈東京〉
関西事務局…〈関西〉

24日(土)	18日(日)	17日(土)	11日(日)	10日(土)	10日(土)	7日(水)	3日(土)	1日(木)	◎ 6月	28日(日)	27日(土)	20日(土)	13日(土)	◎ 5月	22日(土)	21日(金)	19日(水)	17日(月)	13日(木)	8日(土)	6日(木)	6日(木)	6日(木)	3日(月)	◎ 4月		
オープンオフィスデー(関西)	菅屋JOCSのつどい(菅屋聖マルコ教会)	神戸JOCS委員会(神戸YWCA分室)	足利JOCS委員会(足利東教会)	に出席(広島県立産業会館)	第56回定時社員総会(信濃町教会)	定例理事会(信濃町教会)	看護チーム訪問ケア活動(釜石市)	四国高知JOCS委員会(高知教会)	飯田多香子職員入局(東京)	飯田多香子職員入局(東京)	京都JOCS委員会(京都府国際センター)	オープンオフィスデー(関西)	改選派神港教会)	関西JOCSパザー(大阪聖パウロ教会)	◎ 5月	定例理事会(東京)	出展(都立産業貿易センター台東館)第3水曜日に開催)	町田JOCS定例会(メデイカルホームグラニー玉川学園)にて毎月)	大阪JOCS委員会(関西)	第2土曜日に開催)	市井活動サポートセンターにて毎月)	仙台JOCSきつてきつべ(仙台市)	ソ(鴨川河川敷)	京都JOCSチャリティーウォーク(釜石市)	看護チーム訪問ケア活動)	石野祥子職員入局(関西)	河井敦職員入局(東京)

イベント案内 & お知らせ

第56回定時社員総会にお越しく下さい。

第56回定時社員総会を下記のとおり開催します。当日は、JOCS初代ワーカーである梅山猛元ワーカー（インドネシア派遣・医師）の活動を記録した映像を上映します。約50年前のインドネシアでの診療風景などを記録した貴重な映像です。この機会にぜひご覧ください。

多くの方々のご参加をお待ちしております。
(総会の議決権があるのは社員会員のみです)

■日時：2017年6月10日（土）14時～16時

■予定プログラム：

第一部 梅山猛元ワーカーの活動映像上映

第二部 定時社員総会

開会礼拝（礼拝メッセージ：大宮シオン・ルーテル教会 梁熙梅^{ヤンヒメ}牧師）

議事：2016年度事業報告・2016年度決算

■会場：日本基督教団信濃町教会

（JR信濃町駅から徒歩3分）

■お知らせ：社員会員の皆様には総会資料と出欠票を5月20日までにお届けします。6月3日までに出席票をご返送くださいますよう、お願い申し上げます。

「関西 JOCS 2017」開催のご案内

5月20日（土）14時より、神戸市灘区にある日本キリスト改革派神港教会において、「タンザニアで出会った涙と笑いー『みんなで生きる』を考える」というタイトルで、現在タンザニアに派遣されている弓野綾ワーカー（医師）を迎えて、つどいを行います。



弓野ワーカーは、2015年7月からタンザニアのタボラ大司教区傘下の聖アンナ・ミッション病院で勤務を開始し、病棟や外来での診療を行いつつ慢性疾患外来の仕事も始めています。1期3年の任期のうちの2年が経過したところで、現在の活動の様子を聞くことができる良い機会です。

また当日は、関西学院聖歌隊の方々もお迎えし、すばらしい歌声を披露していただくことになっています。

ぜひ、お誘いあわせの上、ご参加ください。

■日時：2017年5月20日（土）14～16時

（開場13時30分）

■場所：日本キリスト改革派 神港教会

神戸市灘区山田町3-1-12

阪急電鉄神戸線「六甲」駅から北へ徒歩3分

■入場無料

※当日は、ご自宅にある使用済み切手をぜひお持ちください。

今号の数字

使用済み切手 運動協力状況	
●1・2月分 協力件数	3806件
受託量	225箱
	1箱7.5キ口

会員状況 (2月末現在)	
●会員数	4,012名
●1～2月 入会者数	8名

ご入会
ありがとうございます

(1～2月)

埼玉県／田邊綾 東京都／大西健之、梶憲明・雅子、菊池方利、福本正勝 愛知県／加藤まどか 大阪府／佐伯明子 沖縄県／インマヌエル那覇キリスト教会(敬称略)

訃報

JOCSワーカーとしてナイジェリアとバングラデシュで活動された宮崎安子元ワーカー(医師)が1月11日に天に召されました。83歳のご生涯でした。謹んでお知らせ申し上げます。

「みんなで生きる」ために働くワーカーを募集しています

JOCSは、すべての人々の健康といのちがまもられる世界をめざして、イエス・キリストの教えに従い、困難の中にある人々の健康といのちをまもり、人々と苦悩・喜びを分かち合いたいと考えています。

JOCSは、何よりも弱くされた人と共に生きることを喜びとし、困難を伴う活動に取り組むワーカー（クリスチャン保健医療従事者）を求めています。

現在、求められている職種は、外科医・整形外科医・産婦人科医・小児科医・保健師・助産師・看護師・理学療法士・作業療法士などです。

*派遣国、派遣先団体は、個別にご相談いたします。

*上記いずれの職種も、経験5年以上の方を求めています。

*英語力はTOEIC700点以上が目安です。

*海外赴任期間は通常3年ですが、64歳以上の方は2年以上で個別にご相談いたします。

*任地によっては、短期ワーカー（1カ月～1年未満）の派遣が可能な場合もあります。

<お問い合わせ先> JOCS 東京事務局 TEL 03-3208-2416 FAX 03-3232-6922
担当：森田 隆（事務局長） E-mail: ryu@jocs.or.jp

2017年タンザニア・スタディツアーのご案内

将来、JOCSのワーカーをはじめ、国際保健医療の分野で働くことを希望する人のためのプログラムとして、タンザニア・タボラ州へのスタディツアーを行います。タボラでは、弓野綾ワーカーの派遣先のタボラ大司教区保健事務所、聖アンナ・ミッション病院などを訪問します。また、現地保健医療施設での活動体験やJOCS奨学生との交流会を予定しています。詳細は次号でお知らせします。

*本ツアーは、将来国際保健医療分野で働く人を育成する企画です。そのため、その対象となる方を優先させていただきます。将来ワーカーとして派遣される方を対象とするため、対象年齢の上限を65歳までとさせていただきます。ご了承ください。

*お問い合わせ：東京事務局 seminar@jocs.or.jp

日程：2017年9月の土曜日発、日曜日着（9日間）

訪問先：タンザニア・タボラ州

費用：約29万円（予定）

定員：12名



2016年に行ったスタディツアー

公益社団法人 日本キリスト教海外医療協力会 http://www.jocs.or.jp

- 東京事務局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-51
電話：03-3208-2416 FAX：03-3232-6922
- 関西事務局 〒530-0013 大阪市北区茶屋町2-30
電話：06-6359-7277 FAX：06-6359-7278
- E-mail info@jocs.or.jp
- 編集発行人 代表者 畑野研太郎
- 編集長 森田隆（JOCS事務局長）
- イラスト 石橋えり子 柏木牧子
- 誌代 1部300円(送料込)
JOCS会員は会費の中に本誌購読料が含まれています。
また年間1万円以上（購読料含む）の寄付をしてくださった方にお送りします。
- 郵便振替口座番号 00170-1-20920

事務局便り
2017年度最初の号では、弓野綾ワーカーの活動紹介をお届けしました。弓野ワーカーは、2012年に開催したJOCS海外保健医療協力者会議の準備委員長の役員、ワーカー、スタッフ等が一堂に会し、進むべき道を熱く協議しました。この協議を元に、JOCSは5カ年の計画を作成し実施しています。目指しているのは、すべての人々の健康といのちがまもられる社会です。今年度も少しずつですが着実に歩みを進めてまいりたいと思います。（小池）